

研究室の窓から



アテネオリンピックを終えて

坂本 涼子

はじめに

「アテネはいつも晴れ」。何かの記事にこんな言葉が載っていた。実際の八月のアテネは、雲ひとつない青い空と海、そして歴史的建造物と現代の町並みが共存する独特な雰囲気素晴らしい所であった。

今年、アテネで開催された第二十八回

オリンピックで、女子レスリングが正式に採用された。そして、このアテネオリンピックに私の勤め先でもあり、母校でもある中京女子大学から、三人の選手(吉田沙保里、伊調千春・馨)を送り出すことができた。

歴史ある女子レスリング

レスリングはギリシャ・スパルタの都市において、紀元前八世紀頃から、強い子どもや兵士として育てるために、女子の競技としても親しまれたという。しかし、近年では関係者の努力にもかかわらず、オリンピックの正式種目にも採用されず、長い間日の目を見なかった。

本学にレスリング部が創設されたのは、一九八九(平成元年)である。レスリング部発足当初の部員は僅か四名で、その中の一人が私であった。今では、笑い話ではあるが、その当時のレスリング部の練習は、グランドの芝生の上で行った。教室の一部を間借りするなど、練習

場を転々とする日々が続いた。

そんな様々な困難もあったが、創部十六年目にして、幸運なことに「オリンピック出場」と「三選手のメダル」という目標を一度に果たすことができた。

アテネオリンピック

私たちは、レスリング部長・部員、本学の学生で応援ツアーを計画し、彼女たちの勇姿を目の前で見ることができた。優勝した吉田のバック転や肩車のパフォーマンスは、記憶に新しいのではないだろうか。大会前に、監督や選手に面会を





したり携帯電話で話をするのができたのだが、四人(監督と三選手)の中では、監督が一番緊張しており、選手たちはそれとは対照的に落ち着いていたのが印象的であった。

オリンピックを終えて：

銀メダルの伊調千春が「金メダルがほしかった。五輪の銀メダルでもうれしくない」と表彰台の上で、笑顔ひとつ見せなかった。千春の意思の強さとそれまでの努力を知っている私たちは、「それは当然だろうな。でも良くがんばった」と決勝戦で九分間フル(三分二ラウンド+延長戦三分の合計九分間)に戦った千春とイリーナ・メラニク(ウクライナ)の健闘を称えた。私などは、悔しい気持ちを素直に言い表した千春に、むしろ尊敬の念さえ抱いた。しかし、世間は違ったのである。実はその発言と態度について、大学側に痛烈な抗議のFAXやメールが数件届いたのである。もちろんこれはごく一部の人の反応ではあるが、そのことで、オリンピックが単なる競技会ではないということを改めて感じた。彼女は「負けて悔しい」と感じたことを素直に口に出した。今回のオリンピックでは、

勝った選手も負けた選手も試合直後のインタビューでまず一番に「皆様のおかげです」と言っていた。その光景に違和感を感じたのは、私だけであろうか。試合直後のインタビューで「悔しい」と言っていた彼女も翌日には気持ちが悪く落ちてき、応援してくださった皆さんに感謝の気持ちを書いてきた。

スポーツマンとしての礼儀は大切である。ただ、四年に一度のオリンピックのために汗水を流して、練習に打ち込んできた選手たちである。その選手たちの素直な気持ちをまるごと受け入れていたのだきたいと願うばかりである。できることなら、試合直前や直後はインタビューなどは受けずに静穏な環境が作れるようにしてやりたかったとも考える。

最後に

オリンピックによって、女子のレスリングは一躍脚光を浴びてしまった。近年の日本のレスリング競技は、どちらとい

うといわゆるマイナーな競技であった。しかし、アテネ大会後は「脱・マイナー」なのである。最近、この「脱・マイナー」による功罪について考えてしまうのである。女性の活躍が数多く報道されるのは喜ばしいことである。同時に恐ろしさも感じる。メダリストである選手たちは、現在もたくさん取材やイベントに引っぱりだこで、十分なトレーニングをすることができない状況にあるのだ。一日も早く彼女たちを普段の生活にもどし、トレーニング時間を確保してやること、私たちが指導者がすべきことかもしれない。

今回、女子レスリングは出場したすべの階級でメダルを獲得することができた。これは、日本のレベルが高いとも考えられるし、競技としてはまだまだ成熟していないと考えることもできる。次の北京大会は今回以上に苦戦を強いられるかもしれない。それだけに四年後の北京が楽しみでもある。



さかもと・りょうこ
中京女子大学・健康科学部

